

大都市の歴史的市街地の言語景観に関する研究

—東京都台東区浅草エリア商店街の看板言語に注目して—

A Study on the Linguistic Landscape of Historic Urban Area of Metropolis : Focus on the Signboard Language of the Shopping Streets of Asakusa in Taito-ku ,Tokyo

張 黎明
ZHANG LIMING

1. はじめに

グローバル化の進展とともに、現代都市、特に国際大都市の景観は均質化しつつある。例えばアメリカの社会学者の George Ritzer は、『社会のマクドナルド化』（英語名：『The McDonaldization of Society 』）（1993）において、都市が同質化していることに警鐘を鳴らした。長井（2012）は、「近代以降、地域固有の「伝統的な風土」に基づく生活様式が衰退していく中で、景観の同質化あるいは標準化していく現象が世界のいたるところで生じてきた。戦後の急速な高度経済成長の中で経済的利益を優先してきた日本においても景観の均質化は進行しており、都市計画や規制によって無秩序な開発を制限してきた西欧に比べ、より顕著なものであるということ」を指摘した。これにより、都市固有の独自の伝統的な魅力が薄れる傾向が強くなっている。都市の歴史文化を伝承するのは長い時間、各歴史時期の風俗習慣や文化様式を物質的に醸成してきた歴史的市街地である。従って、都市の歴史的市街地をありのままに維持するのが重要な課題になる。国際化がさらに進んでいる東京における歴史的市街地の浅草は江戸（下町）から東京（西洋文化・モダニズム）に至る歴史的变化を経験し、今日でも江戸情緒が溢れていて、国内外多くの観光客を惹きつけ、東京の人気観光地の1つである。

都市空間における建物・街路・広場・樹木・看板・ストリートファニチャー・装置等の様々なエレメントがその都市空間のアイデンティティを創出し、さらに都市空間の雰囲気形成している（積田、濱本, 2008）。これらの要素により豊かな都市の景観が形成される。また、垣内（2000）は景観において、「文字」は注目度や注視度が高い要素であると指摘している。文字を含む言語の景観、即ち言語景観は、地域の文化景観には不可欠な一部分として、当地の歴史文化および独特な魅力の伝達に重要な役割を果たしている。現在の日本の商業地区においては、消費的な商業文化が氾濫す

る中で多様な看板群が景観の主役になっている場所が多く見受けられ、街のイメージの多様性をつくっている（川崎ほか, 1993）。街や通りのイメージ作りにおいて、表現としての店名表記は重要な要素である（オバタ・ライマン, 2005）。従って、看板言語は景観の多様性や地域個性には重要な役割を果たしていると言える。

そこで、本研究では台東区（図1）浅草の歴史的発展に合わせて、各時代の歴史文化を凝縮する商店街の店舗看板の言語景観の考察を通して、歴史的市街地の言語景観の特性を明らかにすることを目的とする。さらに、これを踏まえ言語景観の特性やデザインを利用した歴史的市街地の魅力の維持を可能にする提案を検討する。

II章1節では関連文献の分析を通して、日本における言語景観の発展を明確にする。続く2節では、浅草の歴史的発展及びその街の景観を明らかにし、同時に、歴史の流れの中における浅草の言語景観の変化を把握する。III章ではGoogle Street Viewによるオンライン調査及び現地調査をして、II章を基に、商店街の調査結果を看板の使用言語、文字表記種別と書字方向の3つの面から分析し、現在の浅草の言語景観の実態と特徴を明らかにする。IV章では調査結果をまとめて、言語景観の視点から都市の歴史的市街地の風致維持に参考になる提案を考える。

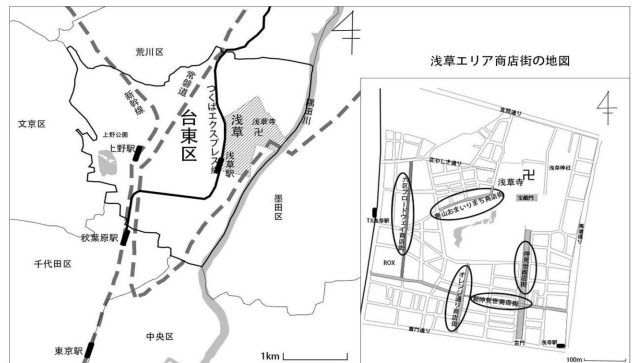


図1. 台東区の地図 Google Map により作成

2. 歴史的発展から見た日本の言語景観と浅草

(1) 日本の言語景観の発展

言語景観という言葉は1962(昭和37)年に日本の地理学者の正井泰夫により新宿の店名看板の言語、文字を対象に行った『新宿の都市言語景観』の中ではじめて使われ、「言語及びその視覚表現である文字からみた都市景観のことである」と定義されている(正井, 1972: 153-158)。その後、地理学、社会言語学、言語学など様々な分野で注目され、言語景観に関する研究が広がっている。言語景観の歴史の有力な研究者である井上史雄(2019)は言語と経済、戦争の視点から、江戸時代後期に遡って、日本における言語景観を調査し、図2に示すような結果を明らかにした。

日本における言語景観の顕著な特徴は漢字優先である。戦前は旧漢字で、戦後は旧漢字が淘汰され、簡略漢字が普及される。明治以前は漢字を中心としたが、明治以降は文明開化の影響で西洋文字であるアルファベットが現れ、日本の自国文字(ひらがな、カタカナ)が増え、言語景観の西欧化の始まりといえる。戦後、簡略漢字も少しずつ減り、アルファベットと自国文字が増える傾向にあり、2000年頃から、外国文字が増加する。日本の言語景観の文字の多様性と国際化が見えてくる。

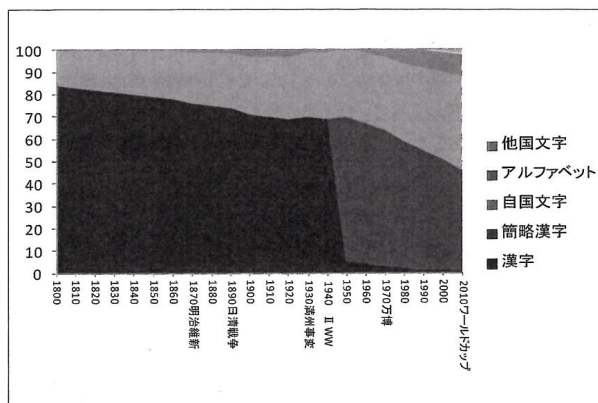


図2. 日本の文字景観の歴史 出典: 井上(2019)『言語景観の歴史』

また、日本語の書字方向の発展については、屋名池誠(2007)が詳しい漢字は日本最初の文字として中国大陸から伝承した際、書字方向も同じく右縦書きとして残され、江戸時代末期まではこの書字方向が使われた。江戸時代以前の寺院の扁額などにみられる右横書きは、現在理解する右横書きではなく、浅草寺の扁額文字「金龍山」(図3)のような一行一文字の右縦書きである。江戸末期に西欧語の横書きの影響で右横書きが登場し、明治初期に左横書きも現れた。戦後には、西洋文化の浸透で右横書きが淘汰され、現在の左横書きが中心となった。



図3. 浅草寺金龍山扁額 筆者撮影

(2) 浅草とその景観の歴史的発展

(i) 近世(江戸時代)

江戸は日本近世における最大の城下町であった。浅草は江戸城の重要な入口として、周辺に全国各地からの大名とその家中、武士たち及び商工業者の町人など各階層の人々が集中し、同時に大量のモノとカネが集められた。

17世紀の江戸文化は主に経済力を持つ大名や武士たちに主導されたが、札差の登場により、武士と町人の経済的な優位性の逆転が開始された。その後、一定の経済力を持つ札差は両国(現在の東日本橋)を中心に店を構え、浅草は江戸で最も人が集中する場所となり、全国からヒト・モノ・カネが集まってきた。さらに18世紀以後になると、武家の経済力は徐々に下がり、町人と武家の地位が逆転して、富裕な商人が江戸文化の担い手として活躍し、新たな町人文化を主導していた。そこで、浅草の庶民文化や江戸の「粋」などの文化はこのように形成された。

(ii) 近代(明治・大正・昭和戦前)

1867年に江戸幕府の政権が終わると、明治維新を契機として日本は西洋文明を積極的に取り入れ、近代化への道に踏み出した。江戸時代の中心として発展してきた「江戸」は「文明開化」の前進基地としての「東京」として変化していった。当時の盛り場「浅草」は江戸時代からの歌舞伎、遊郭(吉原)、浅草仲見世などを維持しながら、文明開化の波に乗ってユニークで“モダン”な街づくりを実践し始めた。

1882(明治15)年に実施した浅草公園地整備事業が浅草の近代的な盛り場への変容の始まりになる(吉見, 1989: 196)。その後、1884(明治17)年には、六区の誕生に伴い、観音堂裏く奥山>, すなわち第五区の見世物小屋や露店は第六区に移転し、見世物小屋や玉乗りなど庶民の娯楽が第六区に登場した。同時に、1885(明治18)年には仲見世通りの煉瓦化も進められ、浅草の景観は江戸時代までのそれと大きく異なるものとなった(吉見1989: 196)。また、1890(明治23)年の日本パノラマ館や凌雲閣等の開館は、浅草の近代都市発展のシンボルである。その後、明治末期から大正初めにかけて、多くの見世物小屋が擬洋風の活動写真館やオペラ館に転業し、同時に、庶民的な常磐

座などの劇座が浅草に進出した。このような動きの中で、浅草は民衆娯楽地の全盛期を迎え、新たな庶民文化の発信地になった。

(iii) 現代（昭和戦後・平成・令和）

戦後から実施された「東京戦災復興都市計画」により、浅草の発展には確実な影響を与えた。東京の都心部の過大な人口が集中することを防ぐために、新宿、渋谷、池袋などのような副都心が形成され、大量の人口を各都心に分散する。同時に、交通線路が完備され、多くの人々、特に若者たちが地下鉄などの開通で新たな副都心に惹きつけられた。そこで、繁華街の中心が徐々に西へと移った（吉見1989）。その上、テレビの普及により1960年代には六区の映画館も閉館して、浅草の集客力は一段と低下し、浅草が衰退し始めた。

平成になると、昭和を懐かしむ高齢の観光客の増加や交通機関の配置などで浅草がまた注目されるようになった。また、2006年に観光立国推進基本法の実施により、外国人観光客は急増して、江戸情緒の色濃く残す浅草を東京の名所として訪れる傾向が強くなる。

3. 浅草における言語景観の考察

(1) 調査対象の商店街の概要

(i) 仲見世商店街

仲見世通りは江戸時代から日本でも有数の門前町として発展してきた。仲見世商店街は合計89の店舗（支店を含む）がある。NPO法人まちづくり協会の三橋（2007）によると、全89軒のうち、明治・大正期に開業した店が全体の40%、昭和初期～1954（昭和29）年までに開業した店が25%を占めている。商店街は入れ替わりが激しいが、仲見世商店街の変化は意外にも少ないということがわかる。現在は主に参詣者や観光客向けの店舗が多く、外国人観光客には人気の観光地である。

(ii) 新仲見世商店街

新仲見世商店街の歴史は1923（大正12）年の関東大震災からの復興のために、東京都区部における枢要部の市街地の整備まで遡ることができる。その後、交通施設の開通で浅草にくるツールが更に便利になり、たくさんの来訪客が集まり、浅草の興行が発展し、盛り場の全盛期を迎えた。当時の新仲見世通りの400メートルは非常に賑やかで、浅草の「ゴールデンベルト」と称される程であった（服部2010）しかし、戦後、六区歓楽街の衰退につれて、商店街の買い物レジャー客は激減した。

現在の新仲見世商店街は2011（平成23）年に完成されたアーケード商店街で、主に地元住民向けのデザイン性が高い商店街で商店街の両側にレストラン、洋品店、装身具、ハンドバッグ、雑貨店、婦人服、紳士服など小売店が並ぶ。商店街には合計107店舗（重複店舗を含まない）があり、仲見世通り、中央通り、オレンジ通り及び公園通りを横断し、5部に分かれる。今は浅草の観光客にも人気の買物のショッピングストリートとして有名である。

(iii) 六区ブロードウェイ商店街

「浅草六区」は浅草公園六区の略称で、大衆の歓楽街として賑わい始めたのは1873（明治6）年に政府によって浅草寺の境内を公園地に指定された明治時代のことである。浅草六区ブロードウェイ商店街は日本における代表的な歓楽街として、近代繁華街の中で非常に有名である。治時代の浅草は多くの芝居小屋が並ぶ「興業街」として知られ、五区の奥山の見世物小屋などが六区に移転することで浅草六区地区は歓楽地として賑やかになり、徐々に「浅草の中心」になった。大衆娯楽の中心地になり、時代の最先端の流行文化の拠点として発展してきた。近年、以前の日本大衆の娯楽地から観光地への転換を始めた。観光地化の進展により、急増する外国人観光客向けの多言語整備を行い、「国際交流文化の拠点」となることが期待されている。

(iv) 奥山おまいりまち商店街

浅草寺の西側、観音堂の裏一帯は「奥山」と呼ばれ、江戸時代中期から大道芸や見世物小屋、軽業などで賑わって、江戸の代表的な盛り場の発祥地ともいわれる（吉見1989：195）。江戸時代の奥山で多くの見世物小屋が並ぶとともに、香具師の本拠となり、軽業や居合抜きなど特異な芸を見せつ物を売った。1882（明治15）年に実施された一連の公園地整備事業を通して、日本における最初の近代公園の1つである浅草公園が誕生した。花やしきと奥山が浅草公園の第五区に区画された。明治中期以降、奥山の大道芸や見世物小屋の多くは六区に移転し、浅草の大衆娯楽は六区へと移った。しかし、料理店、写真店、菓子屋などのような日常生活に根付いた店が残っている。現在は大衆文化が根付く商店街として人気がある。

(v) オレンジ通り商店街

オレンジ通り商店街は現在の浅草寺への参詣道である仲見世通りと平行して、雷門通りと伝法院をつなぐ通りである。商店街としての始まりは大正初期に入ってからで、当時この通りはまだ「区役所通り」であった。商店街のホームページにより、1956年にすで

に吉田貴金属、舟和、蝶屋、アンジェラス、雲井堂、孔雀堂、勉強堂が存在している。1987（昭和62）年に現在の「オレンジ通り商店街振興組合」に変更された。これをきっかけにして、道路がオレンジ色に塗装されて、名実共に「オレンジ通り」になった。2015（平成27）年12月にオレンジ色のカラー舗装が復活し、新たな舗装は鮮やかなオレンジが道路の幅いっぱい広がるのが特徴である。現在のオレンジ通り商店街は浅草の変遷が凝縮された老舗と手仕事の品々が集まり、喫茶店や浅草生まれの和菓子、伝統の手仕事で仕上げた様々な工芸品を売る店が並んでいる。

（2）商店街看板調査の概要

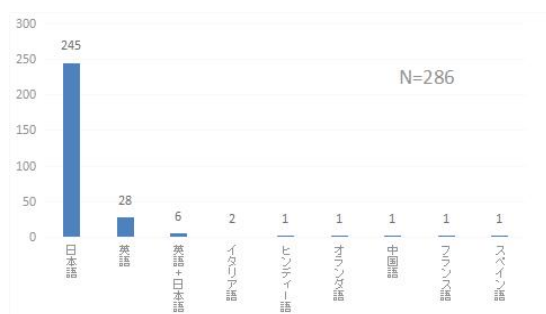
調査店舗について、商店街の路面店だけではなく、複合ビルの2階以上も含む店舗を対象とした。言語景観において看板の色や材質、デザイン性、文字の書体なども重要な要素である。しかし、今回は時間的制約から、店名以外の業種の説明や成立年などの文字を対象から除外し、店名の使用言語のみを中心に、言語種別、文字表記種別と書字方向種別に分類して結果をみる。

（3）全体的言語景観の特徴

（i）言語種別の調査結果

全体からみた言語の使用状況の結果は表1に示す通りである。使用されている日本語が全体286件の245件と全体の約85.7%を占め、圧倒的に多い。また、英語、イタリア語、ヒンディー語、オランダ語、中国語、フランス語とスペイン語の7種の外国語が確認できた。外国語の中で英語が28件、イタリア語が2件、ほかの種類がそれぞれ1件で、英語の優先性が確認される。英語・日本語の2言語併記が6件のみあり、それ以外は単言語表記中心で、多言語表記はあまり見られなかった。

表1. 全体から見た言語種別の使用状況(看板数)

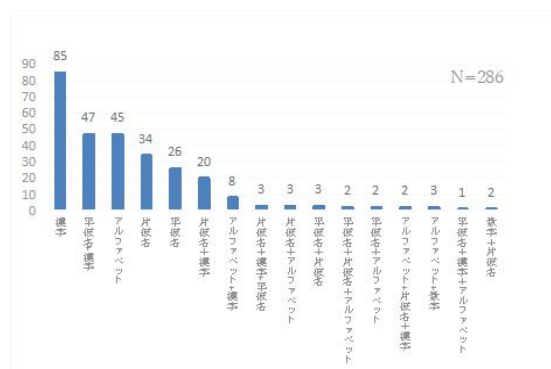


（ii）文字表記種別の調査結果

全体からみた文字表記種別の結果は表2により、主に漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットの4種類

が使われていることが分かる。なお数字も利用されるが、数字単一の表記はなく、他の文字と併用される表記で、8ドシー、BOBA365、そして7ELEVENの計3件の表記であった。しかし、この5種の文字表記の組み合わせにより、16種の表記タイプが浅草の言語景観では確認された。

表2. 全体から見た文字表記種別の使用状況(看板数)

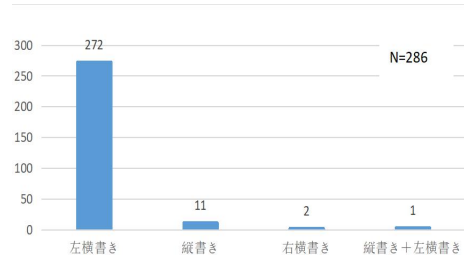


中に、漢字のみの看板が最も多く、漢字中心の日本の言語景観の特徴に当てはまる。アルファベットが漢字に次いで多い。外国語が少ないことから、文字種において2位を占めるアルファベットにおいて日本語のアルファベット中心であることが分かる。この点から、店舗側は外国人ではなく、主に日本人を対象に、もともと西欧語であり、異国情緒があるアルファベットを利用して、浅草のモダンなイメージをつくるという目的があるかもしれない。単一表記のカタカナはひらがなの26件より多く、合計で34件が確認された。主に外来語を表すカタカナが多用されていることから、浅草は以前の娯楽や流行文化の発信地として、西洋のオペラ館や映画館などのような外来文化を積極的に取り入れてきたことの影響がみられる。

（iii）書字方向別の調査結果

書字方向の使用状況の調査の結果は表3に示される通りである。まず、左横書きは全体の286件のうち、272件と、約95%を占める。また、縦書きは11件と意外にも少ない結果であった。日本固有の縦書きは伝統的な雰囲気が溢れる下町の浅草にはよく利用されていると予想したが、全体の4%程度しか占めない。

表3. 全体から見た書字方向種別の使用状況(看板数)

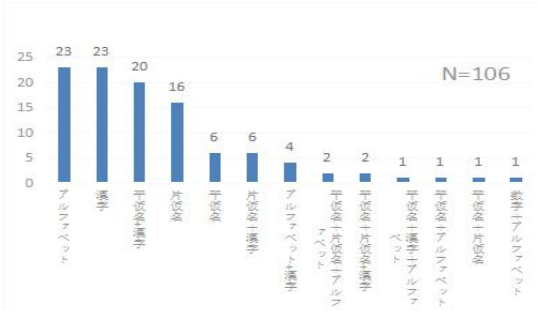


(4) 事例

(i) 新仲見世商店街

新仲見世商店街における文字表記種別の使用状況について、表4に示されるように13種類の文字表記が現れ、その多様さがうかがえる。漢字とアルファベットが同数の23件であり、カタカナは次いで16件、ひらがなは一番少なく、6件のみである。

表4. 新仲見世商店街における文字表記種別の使用状況(看板数)



言語種の使用について、日本語、英語、ヒンディー語、オランダ語及びイタリア語の5種類の言語が確認できた。出現頻度が一番高いのは86件の日本語で、2位は16件の英語である。他の種類はそれぞれ1件ある。また、1例のみの日本語・英語の2言語併記以外はすべて単独言語である。文字表記種の調査結果を合わせてみた場合、アルファベット単一表記が23件、アルファベット含む複数表記が9件あり、合計32件が使用されているが、そのうち外国語が合計20件出現している。従って、新仲見世商店街の言語景観において、アルファベットの半分弱が日本語のアルファベット表記である。異国情緒や西洋風のイメージをもつアルファベットの使用により、新仲見世商店街の雰囲気演出に一定の効果あげていると考えられる。

また、全体の106件の中に右横書きと縦書き・左横書きはそれぞれ1件あり、それ以外はすべて左横書きである。近代の主流になる左横書きが圧倒的に多く利用され、日本従来の縦書きが使用されないため、より近代的なイメージをもたらす。

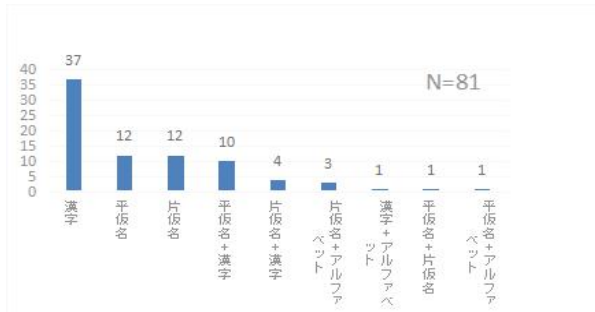
(ii) 仲見世商店街

仲見世商店街における88軒店舗の調査を通して、その言語景観の顕著な特徴は左横書きの日本語のみ利用されていることである。商店街の環境整備で横の統一電飾看板を設置しているため、縦書きの表記が使いにくいこともその1要因であろう。

表5に示す通りのように、漢字、平仮名と片仮名を中心して、9種類の文字表記が確認された。その中に、漢字が37件と最多で、ひらがなとカタカナはそれぞれ同じく12件が確認された。アルファベットもある

が、他の文字との組み合わせの形で使用され、6件のみが確認された。

表5. 仲見世商店街における文字表記種別の使用状況(看板数)



分析結果から、仲見世商店街の言語景観は日本語のみ利用しており、漢字表記が主体で、外来語のカタカナ及び西洋風なイメージがあるアルファベットの使用が少ないという特徴があることがわかった。

(iii) 六区ブロードウェイ商店街

六区ブロードウェイ商店街において、日本語と英語2種類の言語のみ現れる。中に日本語表記は16件、英語表記は7件、日本語・英語言語併記は5件あった。日本語の優先地位がみられるが、英語を含む表記は日本語表記の半数を超えことが言語景観の面で商店街の西洋化と街のモダンなセンスを示している。

その文字表記種の使用について、9種類の文字表記がある。なかでも、単一文字で表記されるのが11件のアルファベット、2件のカタカナ、1件のひらがなと1件の漢字の4種類ある。日本の言語景観をかつて特徴付けた漢字優先タイプは見られず、代わりにアルファベットが高頻度で出現し、他の文字種を大きく引き離して、11件と最も多い。

また、全体28件の中に27件の左横書きと1件の縦書きが使われている。前に分析した結果により、六区ブロードウェイ商店街の言語景観には外国語、アルファベットが多く使われていることが明らかにされた。これは縦書きの使用に影響を与える1つの要因として理解できよう。

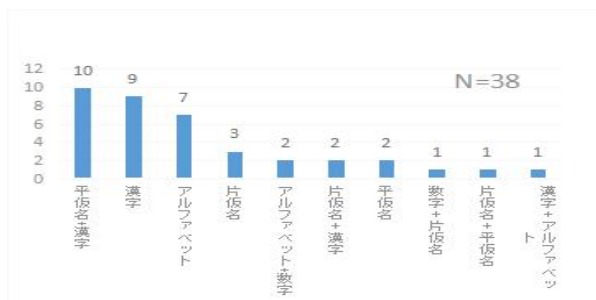
まとめると、六区ブロードウェイ商店街の言語景観の特徴は英語の出現頻度が高く、アルファベットを多く利用し、逆に漢字は極めて少ない。大衆の娯楽地の中心で、流行文化の発信地として有名になる六区の個性やそのモダンな雰囲気は異国情緒の性質をもつアルファベットの利用でよく演出されている。

(iv) 奥山おまいりまち商店街

奥山おまいりまち商店街の調査を通して、38軒の店舗が確認できた。その中に、33件の日本語、4件の

英語と1件のイタリア語の3種類の言語が使われている。日本語を中心に表記され、数が多くない外国語の中で英語優先の傾向がみられる。同時に、32件の左横書きと6件の縦書きが確認された。歴史の長い縦書きの特性を通して、奥山の古さや浅草らしさの印象を強めることに効果がある。

表6. 奥山おまいりまち商店街における文字表記種別の使用状況



漢字、アルファベット、カタカナとひらがなの4種類の単一表記と6種類の複数表記が利用されている。全体からみると、ひらがなと漢字の出現頻度がほかの文字より高い。また、アルファベットの単一表記が7件あり、アルファベットでおしゃれで、モダンなイメージを表す。

(v) オレンジ通り商店街

オレンジ通り商店街において、すべては単一表記で、多言語併記は見られない。その中に、29件の日本語、それぞれ1件ある英語、フランス語、スペイン語と中国語の5種類の言語が出現した。すべては単一表記で、多言語併記は見られない。圧倒的に使われる日本語から、その優先地位がはっきりわかる。外国語は少ないが、その言語景観の多様性と国際化がみられる。

全体で33件あるうち、左横書きは28件、縦書きは4件、右横書きは1件ある。縦書きの出現がある程度で商店街に日本の伝統的な雰囲気を与える。その書字方向の傾向には、浅草の歴史変遷が凝縮されているようである。また、全体的に単一表記が多く、合計6種類の文字表記種が現れている。15件の漢字表記が日本全体の言語景観の漢字優先という特徴に当てはまる。英語、フランス語とスペイン語の3件のアルファベットを除くと、日本語のアルファベットが2件が確認された。カタカナは1件のみ利用され、外来語の表記が少ないということが明らかとなった。

以上から、オレンジ通り商店街の文字種の出現頻度からみると、漢字が中心に使用されており、ひらがなはカタカナ・アルファベットより高いことが分かる。

4. 結論

以上のように、全体から、日本語を中心に、中に漢字が優先地位を占めている。日本自国文字のひらがなは仲見世や奥山のような日本の伝統的な雰囲気が濃い商店街でよく利用され、カタカナは近代的、モダンなセンスをもつ六区や新仲見のような商店街では使用率が高い傾向がある。外国語の使用率は低く、外国語の中では英語が中心であることが分かった。そこで、異国情緒を強調する時は、外国語ではなく、日本語のアルファベットが優先的に利用される。一方、書字方向の面ではより近現代のイメージがある。

まとめてみると、浅草エリアにおける言語景観は漢字、平仮名と片仮名に偏る日本志向が強い。また、外国語が少なく、外国文化の影響は少なく、異文化との接触や交流、いわば「国際化」(尹 2015)があまり進んでいない;多言語併記の表記が極めて少ないことにより、多言語化が少し遅れている。

このような言語景観を通じて、浅草の歴史風致は維持されており、浅草の歴史的市街地としての歴史的雰囲気、江戸情緒や城下町の文化などをある程度で伝えている。

参考文献:

- 1)オバタ・ライマン:表記法から観察するビジネス・アイデンティティー:表参道商店街の店名、麗沢学際ジャーナル、pp39-67、2005
- 2)Ritzer, J: The McDonalozation of Society、Pine Forge Press、1993
- 3)Liotta, S. J. and Miyawaki, M. : A study on the history of "Cinema-city" in Asakusa、2009
- 4)長井彩:現代日本における新しい景観像の特質、2012
- 5)吉見俊哉:都市のドラマトゥルギー 東京・盛り場の社会史、弘文堂、1989
- 6)屋名池誠:縦書き横書き-その歴史と役割、土木学会誌92(5)、P24、2007
- 7)屋名池誠):横書登場日本語表記の近代、岩波書店、2003
- 8)Tokyo- Analysis of land use and landscape transformations based on cadastral maps and photos-. 日本建築学会計画系論文集、74(637): pp617-625.
- 9)浅草観光連盟: <https://e-asakusa.jp/discovery> (最終閲覧日: 2020年10月25日)
- 10)台東区ホームページ: (最終閲覧日: 2020年1月30日)
- 11)垣内宏美、山崎正史:都市景観における「図」と「地」の認知現象に関する考察、都市計画論文集35(0)、pp769-774、2000
- 12)積田洋、濱本紳平:都市空間における<意識型>構成の研究、日本建築学会計画論文集73(623)、pp101-107、2008
- 13)川崎雅史、飯田克弘ほか:京都における街並みサインの意匠性に関する研究、土木学会論文集464(IV19)、pp119-127、1993
- 14)尹亭仁:ソウルの言語景観-英語・日本語・中国語を中心に-、人文研究(187)、pp3-36、2015